

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ニュートンにおける「諸宗派の和解」と「哲学と宗教の和解」
Author(s)	嶋崎, 太一
Citation	ぶらくしす , 25 : 58 - 69
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/55202
URL	https://doi.org/10.15027/55202
Right	
Relation	



ニュートンにおける「諸宗派の和解」と 「哲学と宗教の和解」

Newton on Reconciliation between Religions or Communions, and between Philosophy and Religion

嶋崎 太一 (長野工業高等専門学校)

Taichi Shimazaki (National Institute of Technology, Nagano College)

はじめに

「宗教と哲学とは区別を保っているべきである。我々は神的啓示を哲学に導入するべきではないし、哲学的な意見を宗教に導入するべきではない」(Keynes MS. 6: 1r)。近代物理学の金字塔となった『自然哲学の数学的原理』(以下、『プリンキピア』)の著者、アイザック・ニュートンの遺した草稿にはこのようにある。これは、1710年代の執筆とみられる。時期としては、『プリンキピア』第二版(1713)、『光学』英語第二版(1718年)というニュートンの自然哲学のいわば円熟期にあたる。

この言葉だけを見れば、哲学(科学)と宗教とを峻別する実証的自然科学者としてのニュートン像が浮かびあがるようにも見える。しかし、『プリンキピア』を注意深く読み進めるならば、ニュートンにとって哲学と宗教との関係はさほど単純なものではないことがわかる。『プリンキピア』第二版になって追加された「一般的注解」は、「太陽、惑星、彗星のこの壮麗極まりない体系は、叡智的にして力ある存在者の深慮と支配なしには生ぜられることはなかったであろう」(P940)という言明から始まる神学的議論がおよそ半分を占める。それによれば、超越的かつ実体的に実在する(P941)存在としての万物の主、すなわち「パントクラートル [παντοκράτωρ]」(P940)は、いずれの時にも、そしていずれの所にも実在する(P942)。そしてニュートンは「現象から神を扱うことは、確かに自然哲学⁽¹⁾に属することなのである」(P943)と述べて、彼の神学的議論を結ぶ。このようにニュートンの宗教的関心を裏付ける典拠は、枚挙に暇がない。

ニュートンが神の問題に生涯を通して関心を寄せていたことはよく知られている。ドゥシェインによれば、神学的関心はニュートンの知的生活全体を通じた「通奏低音」であった(Ducheyne 2012: 236)。また、「ニュートンは神に対する特別な絆を意識しており、そして彼は、自分で、神の創造についての究極的な真理を発見する運命にある男だと考えていた」(Manuel 1974: 19)という人物評もある。ところが、ニュートンが神学に強い関心を持っていたのは確かだとしても、哲学と宗教との関係、両者は対立するのか否か、そして対立が何らかの点であるとすれば、和解点はあるのか。その点については依然として不明な点も多い。これが本稿の課題である。

そのために本稿では、まず従来解釈を確認し、そこでは明らかにされてこなかった点を析出する(1)。その上でニュートンの「融和神学」の立場を、教派分裂をめぐる問題意識(2.1)とその基盤となる神学的歴史観(2.2)に注目しつつ検討する。その上で、ニュートンの「形而上学」の概念に着目しながら、彼の哲学と神学の方法論の接点を究明する(3)。

1. ニュートンの「哲学と神学」問題に関する従来説の検討

ニュートンが「哲学」というとき、「自然哲学」を指している点は疑いないと言ってよい。「自

然哲学の数学的原理」と名付けられた『プリンキピア』においても、ニュートンは「自然哲学」を指して端的に「哲学」と表現している箇所もある (ex. P 793)。そこで本稿の問題は、自然哲学と宗教との関係と言い換えることができる。これに対し、ニュートンの「宗教」という言葉の意味するところは明確ではない。そこで、ニュートンの「宗教」の概念が探られなければならない。

ところがニュートンの神学思想の研究は困難を伴う。それは、ニュートンの遺した神学関係の草稿は膨大であるものの、そのうち一つもニュートンは出版しなかったからである。ニュートンの遺品は、彼の姪の娘の嫁ぎ先であるポーツマス伯爵家に継承され、そのうち数学や物理学、光学など「自然科学的」草稿は 1888 年ケンブリッジ大学図書館に移管された。それは今日、いわゆる「ポーツマス・コレクション」として知られ、現在まで比較的まとまった形で保管されている。これに対し、神学を含む「自然科学以外」⁽²⁾の草稿は、1936 年のサザビーズの競売⁽³⁾で世界各地に散在してしまった。幸い、経済学者 J. M. ケインズと東洋学者 A. ヤフダがかなりの草稿を入手し、致命的な散逸を免れた⁽⁴⁾。いわゆる「ケインズ草稿」⁽⁵⁾と「ヤフダ草稿」⁽⁶⁾である。これらの草稿も、これまで一部の研究者によって部分的に活字化されて研究書に収録されたのを除き、1998 年に始動したニュートンのオンライン活字化事業「ニュートン・プロジェクト」までは目にすることもできなかった。冒頭に引用した「ケインズ草稿 6 番」が「ニュートン・プロジェクト」によって活字化されたのも 2002 年になってのことである。ただこの活字化以来、冒頭の引用文はその言明の印象の強さからか、言及されることも近年では少なくない。

冒頭に示した「ケインズ草稿 6 番」を検討するにあたりドゥシェインは、「実験哲学の仕事は、経験と観察によって、諸事物がいかんにして創造されたかではなく、自然の現在の枠組みがいかなるものかを発見することである」(MS. Add. 3970: 242v) という『光学』関連の草稿と関連付けながら、「自然哲学と宇宙創造論的事柄とを差別化」(Ducheyne 2012: 280) しているのだと指摘する。確かにこの解釈は、「現象から神を扱うことは、確かに自然哲学に属する」という『プリンキピア』の言明の整合的読解を支えるものでもある。すなわち、現象を基礎とする神学的議論は哲学に属するものであるが、啓示神学はそうではない、という解釈である。これは、「自然を「(聖書とは別の) 神のもう一つの書物」を読むように探究する」(Pask 2013: 33) という比較的素朴な解釈でもある。このように、ニュートンの自然哲学を啓示宗教としての神学から切り離す見方は、これまで少なからず提出されてきた。ドゥシェインは、ニュートンが「自然という書物の研究が神の摂理の計画を解き明かす」と考えていたが、ただしニュートンにとって神学研究とは異なり自然の研究は、「実験と(物理的) 数学という固有の方法論に基づくべき」であったのだと主張している。すなわち「実験哲学と神学とはともに支えあうものであるが、方法論的には相互に区別されるという考え方をニュートンはもっていた」というのがドゥシェインの見解である (Ducheyne 2012: 283)。この見方にしたがえば、ニュートンにとって神学は、せいぜい「自然という書物」に基礎を置いた自然神学として理解され、聖書に基づく啓示神学と自然哲学とは「区別を保って」いなければならないものであるとされる。

実は、この解釈を助けるかのように、冒頭に引用した「ケインズ草稿 6 番」とよく似た記述が「ポーツマス・コレクション」の中にある。

- 1 哲学を扱うときには宗教を差し控えなければならない。宗教を扱うときには哲学を差し控えなければならない。
- 2 物質は永続的なものではないが、その起源は神の意志にある。しかしそれがいかなる仕方
で、いつ [成立したのか] は明白に示されてはいない。そして神的な啓示ぬきには知られえ

ない。

- 3 人間の魂は不死であるが、それは自然の原因によってではなく神の意志によってである。
- 4 人間の復活の教えは最も古いものである。しかし、物質の起源、魂の不死性、人間の復活に関する問いは哲学には場所をもたない。[...] (MS. Add. 3965: 547r) ⁽⁷⁾

この記述をもとにレヴィティンは、ニュートンが「宗教」と言うときには「啓示宗教」を指していると指摘する (Levitin 2022: 759)。確かに、この記述からは、哲学と啓示の対比が鮮明となっている。たとえば、物質が自然においていかなる振る舞いをするかは哲学 (自然哲学) の主題となりうるだろう。しかし、その物質の起源に関する問いは「哲学には場所をもたない」のであり、それは啓示に委ねられなければならない。

しかし、ニュートンが公刊著作において明示的に自然哲学と宗教の関係を語っているほぼ唯一の箇所を見ると、そこでの叙述は必ずしも上記のような見方だけで説明しきれものではないように思われる。『光学』「疑問 31」⁽⁸⁾の末尾、したがって書物全体の末尾の次の叙述である。

①もし自然哲学がその全分野でこの方法[分析の方法]を追究して、ついには完成されるならば、道徳哲学の領域もまた拡大されるであろう。②なぜなら、我々が自然哲学によって、第一原因とは何か、神は我々に対していかなる支配力をもつのか、またいかなる恩恵を我々は神から受けているのかを知りうる限りで、それだけ、我々相互に対する義務のみならず、我々の神への義務もまた、自然の光によって明らかとなるだろうからである。③もし偽りの神々 [false Gods] の崇拝が異教徒 [Heathen]⁽⁹⁾を盲目にしなかったならば、疑いなく、彼らの道徳哲学は四元徳以上に進んだであろう。[...] ④そして、彼らは我々に、彼らの祖先たちがその墮落以前に⁽¹⁰⁾、ノアとその息子たちの統治のもとに行ったように、我々の真の造り主であり恩恵者でもあるものを崇拝することを教えたであろう。(O 405f. 文頭の数字は引用者)

この一節は、『光学』という著書としても、また『プリンキピア』を含めたニュートンの自然哲学全体からみても、唐突の感を禁じえない。ニュートンにとって「分析」とは、「実験と観測を行うこと、そして帰納によってこれらから一般的結論を描き出し、この結論に対しては、実験や他の確かな真理から得られること以外には意義を認めないこと」(O 404) である。そこで、なぜ、こうした実験的帰納の方法と、こうした神学的な叙述が関連を有するのか、ということが問われなければならないはずである。「聖書という書物」と「自然という書物」の二つが方法論的に区別されるというだけでは、この点を十分に説明したことにはならない。またそもそも、従来の一般的な説明では、『光学』の末尾にこうした宗教論が記されなければならない理由が不明のままである。かろうじて引用文①と②までは、書物の締めくくりにあたり自然哲学の展望や意義を語ったものとして読むことができるとしても、③と④はいったい何を意味しているのだろうか。「自然という書物」に基づく自然哲学と「聖書」に基づく啓示神学とは区別されなければならないという見方だけでは、③と④を整合的に解釈することは難しい。

この③と④に踏み込んだ先行研究としては、ヘンリーの論考を挙げることができる。ヘンリーは 1680 年代の草稿『キリスト教神学の哲学的起源 [Theologiae gentilis origines philosophicae]』⁽¹¹⁾と関連付けながら、1690 年代初頭に『光学』の執筆にとりかかった時期からニュートンが「自然哲学と真なる宗教の間の緊密にして不可分の連関」(Henry 2016: 33) を確信していたと結論づける。本稿は『光学』末尾にニュートンにおける哲学と宗教の関係の核心を見出すという点ではヘンリーと同じ路線に立つ。しかし、ヘンリーが 1680~90 年代におけるニュートンの思想形成に着目するのに対し、本稿は、ニュートンの自然哲学の体系に神学がいかに結びつくかを

究明するためには、1710年代の「融和神学」を手掛かりにしなければならないという立場に立つ。なぜなら、確かに『光学』末尾の叙述は1706年のラテン語訳初版「疑問23」に既に現れていたが、ニュートンが哲学と宗教の連関（あるいは両者の区別）を自覚的に論じるようになるのはむしろ、『プリンキピア』に「一般的注解」を追加し（1713年）、また以下で検討する「ケインズ草稿6番」や「ケインズ草稿3番」を執筆する1710年代になってからだからである。

2 ニュートンの融和神学

2.1 教派分裂の戒め

哲学と宗教の区別を語る本稿冒頭の「ケインズ草稿6番」からの引用部分は、確かに『プリンキピア』や『光学』における自然哲学の方法論として、この部分のみが独立して引き合いに出されることが多いのだが、本来、その草稿の性格からみて、むしろ彼の聖書研究上の論考とあわせて読まれるべきものである。同草稿は次のような7箇条からなることから、今日では『宗教に関する7つの声明』と呼ばれている⁽¹²⁾。

- 1 宗教と哲学とは区別を保っているべきである。我々は神的啓示を哲学に導入するべきではないし、哲学的な意見を宗教に導入するべきではない。
- 2 人は、教派 [communion] に入るときに約定をたがえること以外に教派から破門されることはない。
- 3 宗教と政治、あるいは神の法と人の法は、区別を保っているべきである。我々は、神の法の一部に人の法を設けることがあってはならない。
- 4 教派の約定あるいは規律とは、初期教会において、洗礼あるいは按手を受けるために教理問答受講者に教えられたものであって、それは、死んだ行い [dead works] を悔い改めそれを断つこと、父である一なる神、主であるイエス・キリスト、そして聖霊に対する実践的信仰である。
- 5 死んだ行いということでは我々が意味しているのは、偶像崇拜、無法な肉の欲、欲深さ、野心である。我々は、誤った神々、偶像であるところの悪神とその行いを、神の愛に反するこれに対する崇拜に従事することとともに断つべきである。そして我々は、一なる神、一なるキリスト、そして聖霊を正しく信じ、彼らの名において洗礼を受け、自分自身のように隣人を愛し、[...] ある特定の教派に入るべきである。
- 6 教派ということでは我々は、[...] 崇拜における連帯を意味している。
- 7 人は、[...] 教会指導者組織の命令によって教派に入ったり破門されたりする。(Keynes MS. 6: 1r)

このようにニュートンは、哲学と宗教の区別を説いた後に教派に関する議論を展開し、宗教と政治の区別に言及するのである。いったいこれは何を意味しているのだろうか。

この「ケインズ草稿6番」の第2条以下の意味を解明するための手掛かりが、同じ「ケインズ草稿」に属し、やはり1710年以降の執筆とされる『融和神学 [Irenicum]⁽¹³⁾』（「ケインズ草稿3番」）にある。『融和神学』は、原本にして40頁に及ぶ草稿であるが、その内実は反復も多く、イェルツェンによれば7個の草稿がその中に含まれている (Gjertsen 1986: 279)。中でも「融和神学、あるいは和解 [peace] に向けた教会組織」という標題が記された草稿 (21-25頁) では、計20個の「論題 [Thesis]」⁽¹⁴⁾が展開されている。とりわけ『融和神学』という標題の所以をもっともよく示しているのは「論題17」である。

論題 17

慣習や儀式の違いによって、また、神の法ならぬ別の法の違いによって諸教会を差別化することは不適切であり、それは迷信へと向かうものである。そして、もしこの差別化が教派の不和を引き起こすのなら、宗教の問題としてこれを主張する人物は教派分裂 [schism] という罪に値する。単なる人間の権威、そして宗教の外部の事柄に起因するこの差別化は、宗教の一部として考えられてはならず、教会の定義の中に入れてはならないのである。(Keynes MS. 3: 23)

これに先立つ「論題 7」において「神の法、あるいは王の法に従って人々を統治すること」が「司教や長老の義務」なのであり、「神あるいは王の名において新たな法をつくってはならない」(Keynes MS. 3: 22) のだとニュートンは語る。そして「神の法は不変であり、王の力は神の法と無関係であったり、それに抵触したりしない範囲に限定される」(ibid.)。神の法にのみ基づいて教派が存在するのであり、神の法ならぬ人の法に基づいて教派間の不和が引き起こされてはならない。

『融和神学』では「人は互いを知らないということのために、互いを非難したり破門したり、あるいは互いを異端として扱ったり、互いに喧嘩したり、憎しみあい、見下しあい、あるいは咎めあったりしてはならない」(Keynes MS. 3: 32) とも言われる。ニュートンはこれを、隣人愛の命じる「慈愛の規則」に反すると言う (ibid.) のだが、「論題 17」を踏まえるならば、これを単に隣人愛からの帰結する道徳とするのは狭い解釈であろう。むしろ、「神の法」ならぬ「人の法」と言うべきものによって教派間の不和がもたらされてはならないというのが、『融和神学』の主張の眼目であったと考えられるべきである。よってニュートンが「宗教と政治」の区別を語るとき、「政治」とは特に教会統治、とりわけ教会において「神の法」に加える形で教会がつくりだす「人の法」を指すとみなされなければならない。宗教と政治の区別とは、まさに「神の法」と「人の法」の区別なのである。

既にフォースやゴールドディッシュが注目したように (Force 1994: 140ff., Goldish 1998: 128ff.)、ニュートンは『融和神学』など複数の草稿において、乳と肉の比喻を用いる。この比喻は聖書において『ヘブライ人への手紙』などに見出される⁽¹⁵⁾が、ニュートンはそれを、死んだ行いを悔い改めそれを断つことなどといった「キリストの教えの基礎にして第一原理」である「赤子のための乳」と、洗礼を受けた後に学ぶ「固い肉」と解釈する (ex. Keynes. MS. 3:1, Bodmer MS. Ch. 2: 20)。すなわち、神の法としての乳と、その後人法として付け加えられるべき「固い肉」という対比である。「ヤフダ草稿 15 番」ではさらに明確に「固い肉を、赤子に与えられるべき乳と混同するべきではないのだが、ラテンの諸教会はそれをしてしまった」(Yahuda MS. 15. 7: 135v) と問題提起がなされる。ニュートンの宗教論における一貫した問題意識の一つである「教会の墮落」(cf. Yahuda. MS. 15. 2: 36r)⁽¹⁶⁾の一つと言ってよいだろう。草稿『教会について』(「ボドマー草稿」)⁽¹⁷⁾では次のように語られている。

乳/肉の問題は、教えが真であるか誤りであるかということではない。むしろ、それが使徒の言語によって伝えられたものであり、根本的真理であるかどうかという点にある。そうした真理は、使徒が赤子のための乳と呼ぶものであり、人はそうした真理を洗礼に先立って信じなければならず、使徒信条において常に真であり、初めから教派の約定であったものである。もし教えがこうした真理ではないのなら、それを根本的なものとして押し付けることは、騒がしき教派争い [factions]、教派分裂 [...] を作り出すことである。(Bodmer MS. Ch. 5/5a: 79r)

このようにニュートンの「融和神学」の立場は、教会の説く様々な教えのうちで根本的なもの

である「神の法」を析出し、後から「人の法」として加えられたものをめぐって争うことを戒めるものであった。

2.2 全民族の道德律

それでは「神の法」とは何であろうか。それこそが、神の愛と隣人愛に他ならない。「宗教の事柄において第一の偉大な戒律とは常に次のようなものである。すなわち、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、汝の神である主を愛しなさい。そして第二に、汝は汝自身と同じように汝の隣人を愛しなさい、である」(ex. Keynes MS. 3: 1⁽¹⁸⁾)。ニュートンによればこの二つの戒律に「あらゆる法と預言がぶら下がる」(ibid.)。ここで『光学』「疑問 31」を思い起こすならば、「我々相互に対する義務」と「我々の神への義務」(②)とは、この神の愛と隣人愛という「神の法」に他ならないであろう。

しかし重要なことは、ここでニュートンの意図が、単にキリスト教の基本精神を確認することにあるのではない、ということである。「これ〔この二つの戒律〕は、モーセとキリストによって確立されたノアの息子たちの宗教でもあったのであり、依然として力を持っているのである」(Keynes MS. 3: 7)とニュートンは言う。このようにニュートンは、神の愛と隣人愛をノアの時代にまで遡って論じる。ニュートンがわざわざこうした諸聖人の名を挙げる背景には、この教えを人類の思想の歴史に重ね合わせ、キリスト教徒のみならず「全民族」の教えとして位置付けるという野心的な戦略がある。「神を愛すること、そして隣人を愛すること〔という戒律〕をもつ宗教とは、アブラハム、メルキゼデク、そしてモーセの時代にまで伝わったノアとその息子たちの宗教であった」(Keynes. MS. 3: 17)とニュートンは語る。この歴史観は、同時期の草稿「ヤフダ草稿 15 番」にも展開されている。

真の宗教は、ノアによってその子孫に伝えられた。そして彼らが背いて自らの死んだ王や英雄たちへの崇拜へと走り、そうすることで神の民を否定し神の民であることをやめたとき、そのように背くことのなかったアブラハムとその子孫のもとで、真の宗教は持続した。(Yahuda 15. 3. 57r)

ドゥシェインの表現を用いるならば、このノアの宗教、すなわち「真の宗教」とは、全民族にとつての「原宗教 [Ur-religion]」(Ducheyne 2009: 26)なのである。

それゆえ「ノアと彼の息子たちの宗教は、全民族の道德律であった」⁽¹⁹⁾ (Keynes MS. 3: 5)。「全民族は根源的には一つの宗教を持っていたのであり、この宗教はノアの息子たちの教えに本質をもっていた」(Keynes MS. 3: 27)ともニュートンは言う。「神の民の宗教は、儀礼的なものを除き、一にして同一であった」(Bodmer MS. Ch. 1: 1-2)。ニュートンによればこの教えは、「自然の法則であり、そして全民族を拘束する宗教の本質的な部分であって、またこれからもずっとそうである」(ibid.)。

『融和神学』や『教会について』と同時期の草稿で、「ケインズ草稿 7 番」と分類される『真なる宗教の素描』では次のように語られる。すなわち、「我々は我々自身と同じように隣人を愛さなければならない。我々はあらゆる人々に慈愛をもたなければならない」(Keynes MS. 7: 1v)ということはノアによって教えられたものであり、「後の異教徒たち [later heathens] にはソクラテス、キケロ、孔子、そして他の哲学者たちによって、またイスラエルの民にはモーセによって、キリスト教徒たちにはキリストとその弟子たちによってより完全に教えられたものである」(Keynes MS. 7: 2r)、と。

『宗教に関する 7 つの声明』(「ケインズ草稿 6 番」)では、「神の法」には「死んだ行い」の戒め

が含まれ、そしてこの「死んだ行い」としてニュートンは偶像崇拝を挙げていた。なぜなら偶像崇拝は、「神の愛」という義務に反したのだからである。偶像崇拝は「真なる神への奉仕を怠る」(Keynes MS. 7: 1r) ものであるばかりか、「偽りの、あるいは仕立て上げられた⁽²⁰⁾神々 [false or feigned Gods]」(ibid.) を信じることであり、ニュートンは『真なる宗教の素描』において語る。「偶像とは、この世界において無であり、欺瞞であり、偽りであり、架空の力である」(Keynes MS. 7: 1v)。ニュートンは、聖書に典拠を示しながら⁽²¹⁾「偶像崇拝を行う者たちが崇拝しているのは悪霊であり魔神である」(ibid.) と批判する。偶像崇拝とは、本来のノアの宗教に対して、偽りの神々を仕立て上げる行いなのである。それゆえ我々は、偶像崇拝に陥ることなく、「一なる神、すなわち、無限にして永遠で、遍く存在し、全知にして全能であり、全事物の創造者たるものを認めなければならない」(ibid.)。さらにニュートンは、このことが「宗教の第一にして主要な部分」なのであり、「これは、世界の始まりから終わりに至るまで、すべての神の民の宗教 [the religion of all God's people] にとって常にそうだったのであり、そしてこれからもずっとそうなのである」(ibid.) という。

ここで注意しなければならないことは、偶像崇拝を避けることは「神の法」に属するべきことであり、いわば「乳」であるという点である。したがって、ニュートンの融和神学においても、この「死んだ行い」に手を染めないことは妥協の余地がない。よって、「人の法」によって教派分裂を引き起こすという罪にもまして罪深いものであり、これに陥ることは、言うならば「乳」と「肉」の混同という「墮落」以前の「墮落」である。

ここで『光学』「疑問 31」を想起するならば、「偽りの神々の崇拝がキリスト教徒を盲目にしなかったならば」(③) という叙述は、キリスト教徒の一部が、偶像崇拝によって偽りの神々を仕立て上げ、それによって盲目になっているという問題提起として読まなければならない。

3. 形而上学と誤謬

ニュートンの草稿「マクルズフィールド・コレクション」⁽²²⁾には次のような叙述がある。

形而上学は異教徒の古代神統記に起源を有する。そこで異教徒たちは、自然のうちの太陽、月、星々、諸要素、諸知性、人間と諸動物の霊魂、そしてあらゆる諸物を最高の神の諸部分であると、あるいは神の力であると仕立て上げた [fingo]。このことから帰結するのは、自然それ自体が最高の神であるということである。この哲学において異教徒たちは偶像崇拝を打ち立てた。そしてモーセは、世界の一部にあるこうしたカルトを廃棄することによって、この哲学を非難し、主である神を、遍く現前するもの、自然から区別されるものとして確立したのである。(MS. Add. 9597. 2. 11: 2v) ⁽²³⁾

ここでは偶像崇拝とは、「神の力」を仕立て上げる形而上学として語られている。そして、そうした「カルト」を廃絶したのがモーセであるとニュートンは語る。モーセがこれを廃絶したとはいかなることであろうか。前節の検討を踏まえるならば、モーセはノアの息子たちの宗教をより完全な仕方で伝えた者の一人である。ここでニュートンは、「神の力」が誤った仕方で仕立て上げられ、異教徒たちが「原宗教」から墮落し「カルト」へと転落したこと、そしてそれを正すのがモーセであるという歴史観を展開しているのである。

それでは、こうした異教徒たちの教えが「形而上学」であるとは何を意味するのだろうか。

『光学』「疑問 28」においては、「後代の哲学者たち [later Philosophers]」が「すべてを機械的に説明する仮説を仕立て上げ [feign]、他の原因 [機械的に説明されない原因] を形而上学に委ねてしまった」(O 369) と述べられている。『光学』や『プリンキピア』においては「形而上学」につ

いてそれ以上の目立った言及は見当たらないが、『光学』「疑問 31」の草稿には、「経験に基づかないすべての形而上学は仮説である。そして、形而上学的命題が経験に基づいている限りにおいて、それらは実験哲学の一部である」(MS. Add. 3970: 621v) とされている。ここでの「形而上学」の用法は多義的で、経験に基づくものと、基づかないものとがともに「形而上学」と呼ばれる。同様に、次のような「マクルズフィールド・コレクション」の言明も、ニュートンにおける「形而上学」の多義性を示している。

形而上学において教えられることは、それが啓示から導出されるならば、それは宗教である。それが、五つの外的感覚による現象から導出されるならば、それは物理学である。それが反省の感覚による我々の心の内的な作用の知識から導出されるならば、それは単に人間の心とその観念についての哲学なのだが、これも内的現象として、同様に物理学に属するのである。(MS. Add. 9597. 2. 11: 1v-2r) ⁽²⁴⁾

「形而上学」と同様に、ニュートンの「現象」概念もまた広く、外的感覚のみならず思考や感情など内的な感覚によるものも含まれることは、「五感によって知られることになる外的な事物であれ、思考によって我々の精神のうちで内省される内的な事物であれ、知覚されるものはすべて、現象と呼ばれる」(MS. Add. 3965. 422v) などの言明から明らかである。経験に基づく形而上学とは、現象から導かれる「実験哲学」の扱う領域である。ニュートンの「実験哲学」においては、「命題が現象から導出され、帰納によって一般化される」(P 943)。そしてそれこそが、ニュートンが『光学』において掲げる「分析」の方法であった (O 404)。ニュートンが構築しようとしたものとは、外感であれ内感であれ、我々の直観に与えられる「現象」に基礎を置く形而上学であり、それを彼は「哲学」と呼んだ。これに対し、現象に起源をもたない形而上学とは、何らかの仮説を仕立て上げることである。「私は仮説を仕立て上げない [hypotheses non fingol]」(P 943) という有名な一節にもあるように、ニュートンはこのタイプの形而上学を非難するのである。このことは神学においても同様であり、誤った仕方で「神の力」を仕立て上げる「異教徒」の形而上学もまた、否定される。宗教においては「ノアの宗教」に、自然においては「現象」に根拠を有さない事柄を仕立てることによって、「墮落」を引き起こすことは厳として戒められる。

それゆえにニュートンは『光学』において、現象に基礎を置く哲学を正しく遂行する (①、②) ことと正しい信仰への道 (③、④) とが軌を一にするものであることを、書物の終わりに宣言したのである。

結論

ここで一つの疑問が浮かび上がる。ニュートンの実験哲学において、常に推論により得られた結論が「実験や他の確かな真理から得られること以外には」真と認められるという条件を有している。このことは『プリンキピア』における「哲学することの規則」のうち「規則 IV」において次のように述べられていた。

実験哲学においては、帰納によって現象から集められた命題は、どんな反対の仮説にも妨げられず、そうした命題をさらに正確にするか、それを除外されるべきものとするような他の命題が現れるまで、正確に真理と、あるいは可能な限り真理に近いと考えられるべきである。(P 796)

現象の実験による修正可能性と、「神の法」を疑いなき拠り所とみなす彼の宗教論とは、果たして両立しうると言えるのだろうか。この点はニュートンの聖書解釈方法論⁽²⁵⁾を再検討しなければならないが、さしあたり、神学にあつては「神の法」を読み解き、哲学にあつては実験により「現象」を正しく読み解く、「神の似姿 [imago Dei]」⁽²⁶⁾としての人間理性に対する信頼がニュートンの方法論を裏打ちしていたと答えることができるだろう。

ニュートンは、「ノアの息子たちの宗教」の本旨、すなわち神の愛と隣人愛という「神の法」に拠らない、仕立て上げられた「教え」によって教派間の分裂がなされることを強く非難する。

「神の法」は、全民族の道德律であり、あらゆる教派、ひいてはあらゆる宗教がそこに出発点を有している。だからこそニュートンによれば、神の愛と隣人愛に基づいて和解がなされるはずなのである。

哲学と宗教とは、対象が異なり、確かに哲学に対して、現象として現れることのない啓示を持ち込むことは戒められなければならない。しかし、二つの対象に対して異なる方法論で向き合うのではない。むしろ全く逆に、ともに神の作りたもうた根拠にその拠り所を有し、そしてそれ以外に「仮説」のごとき人為的なものを仕立ててはならないという点で両者は方法を一にしていた。そして、最終的には神において両者が一なる「教え」となることをニュートンは確信していたのである。

※本研究は、日本学術振興会科学研究費（23K12010）の助成を受けたものである。

注

- (1) この箇所は、第二版では「自然哲学」ではなく「実験哲学」と表現されていた。非常に興味深い点であるが、本稿ではこの書き換え問題には踏み込まない。
- (2) ただし、いわゆる錬金術的な草稿も含め、ここで「自然科学以外」と分類されたものもまた、『プリンキピア』や『光学』とも実は関連が深いことが、近年では指摘されることが多い。筆者もまたその立場をとる。
- (3) ケンブリッジ大学に移管された自然科学的草稿以外のものが伯爵家に返却されたが、1936年に競売にかけられることになった一説によれば伯爵家の相続税と離婚に伴う出費が重なったことによる措置であった。この競売の経緯については Spargo (1992) に詳しい。
- (4) ニュートンの草稿を調査したドライの見立てによれば「サザビーズの競売で販売された 30 ほどの草稿は、知られぬ購入者によって知られぬ場所に保管されているか、あるいはもはや失われている」が、ケインズやヤフダがかなりの数の草稿を入手したために「壊滅的」な状況ではない (Dry 2014: 208)。マニユエルは、未発見の資料があっても、現在得られている草稿群から導かれる結論を変更するほどではないと推定している (Manuel 1974: 11)
- (5) 「ケインズ草稿」は、経済学者 J. M. ケインズが 1936 年の競売により入手した（競売後に購入者から入手したものも含む）草稿であり、主として神学的、錬金術的な内容からなる。その際ケインズがかなりの点数を入手に成功し、それらが現在、「ケインズ草稿」としてケンブリッジ大学キングスカレッジが保管している。
- (6) 東洋学者 A. ヤフダが入手し、現在はイスラエル国立図書館に保管されているもので、ニュートンの神学的草稿の大部分がこれに属する。なおヤフダはケインズとの間で草稿の交換を行っており (Spargo 1992: 131)、「ヤフダ草稿」成立は「ケインズ草稿」の成立と不可分の関係にある。
- (7) この草稿は Levitin (2022: 758) によって初めて活字化された。本稿の引用もこれを参照している。
- (8) 『光学』英語初版 (1704 年) にはこれに対応する箇所はない。1706 年のラテン語初版 (S. クラーク訳) において追加された 7 つの新たな「疑問」の最後「疑問 23」にあたるのがこの箇所

ある。英語第二版（1718年）になってさらに「疑問」が8つ追加されて、ラテン語初版の「疑問23」が「疑問31」となった。なおラテン語初版の「疑問23」が英語第二版で「疑問31」になるにあたり、少なからぬ加筆修正が施されたが、この箇所はラテン語初版に既にあったものである。

- (9) ニュートンが“heathen”や“gentiles”という語で「異教徒」というとき、ユダヤ教に対する「異教徒」を意味する。さらに、ユダヤ教以外の教え全般を指す場合と、特に「キリスト教徒」を指す場合とがある。ニュートンの不完全な草稿“*Theologiae gentilis origines philosophicae*”も『キリスト教神学の哲学的起源』と訳されることが一般的である。
- (10) この箇所は1721年の英語第三版に加筆されたものである。さらに、第二版へのニュートンの書き込みでは、これに加え「ノアの7つの訓戒 [the seven Precepts of the Noachides] が、根源的には全民族の道徳律であった […]」とあるようである (Shapiro 2021: 413)。
- (11) 『キリスト教神学の哲学的起源』は未整理の原稿で、「ヤフダ草稿16番」、「ヤフダ草稿17番」、「ヤフダ草稿41番」、「ケインズ草稿146番」などを総称したものである。なおウェストフォールによれば、本稿が主題とする『融和神学』はこの『キリスト教神学の哲学的起源』のテーマにニュートンが回帰したものである (Westfall 1980: 820)。とはいえ筆者の見限り、哲学や信仰の方法論には、この『キリスト教神学の哲学的起源』の時点では自覚的ではない。本稿が、ヘンリーとは異なり、「ケインズ草稿6番」など1710年代の草稿に着目する根拠はそこにある。
- (12) ただし、7箇条目の後に「8」と番号のみ書かれているから、ニュートンが「7箇条」として構想していたものでないことがうかがえる。
- (13) この“*Irenicum*”という標題は、1659年のE. スティリングフリート (1635–1669、聖公会の支持者であったイギリスの神学者) の同名著作から着想を得たものだと考えられる (Goldish 1998: 114)。
- (14) 「論題」は当初「提題 [Posit]」と記され、その後訂正されている。なおこの20個の論題が含まれる草稿とは別に9つの「提題」が含まれる草稿も『融和神学』には含まれている (Keynes MS. 3: 17-20)。
- (15) 「乳を飲んでいるものはだれでも、幼子ですから、義の言葉を理解できません。固い食物は、善悪を見分ける感覚を経験によって訓練された、一人前の大人のためのものです」(『ヘブライ人への手紙』5. 13-14)。
- (16) 教会の墮落、あるいは宗教の墮落はニュートンの神学全体を貫く関心事であるともいえる。本稿の主題といは直接関係しないが、ニュートンは、『ヨハネの手紙1』と『テモテへの手紙1』の改竄問題を論じて三位一体論を非難した『聖書の二つの墮落についての歴史的説明』と題する論考を執筆しロックに送ったが、その後回収している。それがちょうど1690年のことである。
- (17) ジュネーヴの「マーティン・ボドマー財団」に保管されている草稿である。「ボドマー草稿」は「ニュートン・プロジェクト」でも活字化されておらず、Goldish (1998: 172ff.)に抜粋が掲載されているのみである。本稿の引用もGoldish (1998)による。なおゴールディッシュによれば、『融和神学』は『教会について』の準備的な素材である (Goldish 1998: 110)。
- (18) ニュートンは、この戒律の典拠として『融和神学』においては『マタイによる福音書』22.27を示しているが、同書22.37の誤りであろう。なお『教会について』では正しく22.37が示されている (Bodmer MS. Add. Ch. 1: 1r)。
- (19) これと類似の叙述が『光学』英語第二版へのニュートンの書き込みにある。注10を参照。
- (20) この“feign”という言葉はニュートン研究において、ラテン語“*finjo*”の訳語として知られている。ニュートンのよく知られた『プリンキピア』における言葉「私は仮説を仕立て上げない [hypotheses non finjo]」の現在一般に採用される英訳は“I do not feign hypotheses”である。実際に『光学』において「仮説を仕立て上げることなく [without feigning Hypotheses] と英語で記されていることから、この訳語はニュートンの意図したものであった。
- (21) 『レビ記』7.7、『申命記』32.17、『歴代誌2』11.15、『詩編』106.37、そして『コリントの信徒

への手紙 1』 10.20、『ヨハネの黙示録』 9.20 である。

- (22) 「マクルズフィールド・コレクション」とは、「ポーツマス・コレクション」と同様に現在はケンブリッジ大学図書館に保管されている草稿群である。これは、1999 年までマクルズフィールド伯爵家に保管されていたものである。
- (23) 活字化は Ducheyne (2012: 261f.) を参照した。
- (24) 活字化は、Cohen (1999: 54)、Ducheyne (2012: 256) を参照した。なおこの箇所は、『プリンキピア』第三版 (1726 年) のための序文の草稿に含まれるものであり、早くとも 1713 年 (第二版) 以降、おそらくは 1716~17 年頃の執筆と推定されている。
- (25) ニュートンの遺稿『ダニエルの預言と聖ヨハネの黙示録に関する考察』においてニュートンの聖書解釈方法論が開陳されており、これと『プリンキピア』の「哲学することの規則」との類似性が指摘されている (Mamiani 2001: 3)。
- (26) 『光学』ラテン語初版「疑問 23」(英語第二版における「疑問 31」)にこの言葉が見られる (Kassler 2018: 22)。ただし英語第二版ではこれに当たる言葉は見当たらない。この点については稿を改めて検討したい。

凡例

- 本文中の [] は筆者による補足である。また引用文中の [...] は筆者による中略である。
- ニュートンの著作からの引用は、略号とページ番号を本文中に示した。略号と典拠の対応は以下のとおりである。
 - P: Newton, I. (1999), *The Principia: Mathematical Principles of Natural Philosophy*, ed. by I. B. Cohen & A. Whitman, London.
 - O: Newton, I. (1952), *Opticks: Or a Treatise of the Reflections, Refractions, Infections & Colours of Light*, ed. by I. B. Cohen, with a Foreword by A. Einstein, based on the 4th Edition (1730).
- 「ポーツマス・コレクション」と「マクルズフィールド・コレクション」からの引用は、ケンブリッジ大学図書館 (<https://cudl.lib.cam.ac.uk/collections/newton/1>、2024 年 2 月 26 日最終閲覧) によりオンライン公開されているデジタル原稿の番号 (MS. Add....) を本文中に示した。なお引用に当たり参照した活字化資料は、その都度注記した。
- 「ケインズ草稿」と「ヤフダ草稿」は、「ニュートン・プロジェクト」(<https://www.newtonproject.ox.ac.uk>、2024 年 2 月 26 日最終閲覧) から引用し、それぞれ Keynes MS....、Yahuda MS....として本文中に示した。
- 「ボドマー草稿」は、Goldish (1998) から引用し、Bodmer MS として本文中に示した。
- 聖書からの引用は、日本聖書協会刊行の新共同訳聖書 (1987) による。

引用・参考文献

- Dry, S. (2014): *The Newton Papers: The Strange & True Odyssey of Isaac Newton's Manuscript*, New York.
- Cohen, I. B. & Westfall, R. S. (eds.) (1995): *Newton: Texts, Backgrounds, Commentaries*, New York.
- Cohen, I. B. (1999): A Guide to Newton's Principia: in: I. Newton, *The Principia*, ed. by I. B. Cohen & A. Whitman, London.
- Ducheyne, S. (2009): "Isaac Newton's 'Of the Church' Manuscript Description and Analysis of Bodmer MS. in Geneva", in: *European Journal of Science and Tehcnology*, vol. 5, No. 2.
- Ducheyne, S. (2012): *The Main business of Natural Philosophy: Isaac Newton's Natural-Philosophical Methodology*, Dordrecht.
- Force, J. E. (1994): "Newton, the Lord of Israel, and Knowledge of Nature", in: R. H. Popkin & G. M. Weiner (ed.), *Jewish Christians and Christian Jews*, Dordrecht.
- Gjertsen, D. (1986): *The Newton Handbook*, New York.
- Goldish, M. (1998): *Judaism in the Theology of Sir Isaac Newton*, Dordrecht.

- Henry, J. (2017): “Enlarging the Bounds of Moral Philosophy: Why did Isaac Newton Conclude the *Opticks* the Way He Did?”, in: *Notes and Records of the Royal Society*, vol. 71.
- Kassler, J. C. (2018): *Newton’s Sensorium: Anatomy of a Concept*, Cham.
- Leivitin, D. (2022): *The Kingdom of Darkness: Bayle, Newton, and the Emancipation of the European Mind from Philosophy*, Cambridge.
- Mamiani, M. (2001): “To Twist the Meaning: Newton’s *Regulae Philosophandi* Revisited”, in: J. Z. Buchwald & I. B. Cohen (eds.), *Isaac Newton’s Natural Philosophy*, London.
- Manuel, F. E. (1974): *The Religion of Isaac Newton*, Oxford.
(邦訳：竹本健 (訳) (2007): 『ニュートンの宗教』、法政大学出版局)
- Pask, C. (2013): *Magnificent Principia: Exploring Isaac Newton’s Masterpiece*, New York.
- Shapiro, A. E. (2021): *The Optical Papers of Isaac Newton: Vol. 2*, Cambridge.
- Spargo, P. E. (1994): “Sotheby’s, Keynes and Yahuda: The 1936 Sale of Newton’s Manuscripts”, in: P. N. Harman and A. E. Shapiro (eds.), *The Investigation of Difficult Things: Essays on Newton and the History of the Exact Sciences*, Cambridge.
- Westfall, R. S. (1980): *Never at Rest: A Biography of Isaac Newton*, New York.
(邦訳：田中一郎、大谷隆昶 (訳) (1993): 『アイザック・ニュートン I、II』 平凡社)